

[10_01]九州大学大型計算機センター広報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1472520>

出版情報：九州大学大型計算機センター広報. 10 (1), 1977-03-01. 九州大学大型計算機センター
バージョン：
権利関係：



計算工場と情報処理センター

北 川 敏 男 *

全国七大学におかれている、全国共同利用大型計算機センターの機能を、責任ある地位のある方が、大型ソロバンであるといわれた。この批評は、これらは、それだけでは、困るという意味であるらしい。また、センター長を経験された、ある専門家が大型ソロバンとはいわれなかったが、計算工場のようなものだと、述べられているのを聞いたことがある。これにも、批判の趣がある。さらに、ある大学での話では、計算センターの世話が、ある特定の学部には、体よく押しつけられ、他の学部はサービスを受けるだけの側にまわっていて、従ってあまり文句もいえなくなる。かくして実は運営上のマネリズムに陥っている、という意見がぶつぶつ起っているという。

こういう批判や意見は、九大を定年退職して東京に住むようになってから、いろいろの大学の先生方、文部省当局の方々と、接する機会が多くなるにつれ、実はよく耳にするようになった。九州大学大型計算機センターは、いつの時点においても、年間レンタル料予算に比し、よくやっているという評判も、併せて承っているので、設置当初の時期に関係した者の一人として、内心うれしく思っている次第である。けれども、上記の批判や意見については、九大大型計算機センターには、あてはまらないとも言いきれまい。他の大学大型センターと同様に、九大大型センターも今直面しつつある課題であるといえるのではなからうか。

問題は、もちろんそう簡単ではない。外部から何といわれようと、センター内部の方々にとっては当面ジョブをこなしてゆくことにおいて、機械処理能力、人員・予算何れについても制約条件が厳しく、大変な苦勞をしている筈である。これら焦眉のことを解決せずして、全国共同利用大型計算機センターに、新しい任務をさらに負荷するのには、にわかに賛成し難いというのもわからないではない。

しかしそれはそれとして、なぜ大型ソロバンだとか、計算工場だとかいう比喩が提起されてきたかという理由や原因は、サービスを提供する側もサービスを受取る側も、虚心坦懐、冷静かつ組織的に検討すべき時期になっているように思われる。

ソロバンといわれる理由は、数値計算ないし統計処理が、利用の大部分になっていることをいうのであるが、なぜそれが批判の対象になるのであろうか。数学、統計学に育った私のような方からいえば、むしろ反論したいくらいである。しかし、学問全体を見渡してみれば、コンピュータに期待する機能の重点が次第に変わってゆく、それは、学術情報処理という、より一般の機能をこそ期待しているというべきものであるように思われる。

工場というものの、それ自身はある意味で当然であり、大型計算機センターの運営において、作業基準が厳格、綿密に規定され、それに従って進行してゆく近代工場のイメージがそこに感得されるような運営はむしろ成功というべきことなのである。それなのに、何か不満をふくむような批判があるのは、何故であろうか。研究の現場において、計算機を、もっと対話方式で使いたいという、要請があり、その方式ならば保有し得るであろう、利用者の自由さ、機動性、柔軟性等が、現在の大型計算機利用方式では欠けていることを指摘しているのではなからうか。もちろんこういう性能の欠如な

* 九州大学名誉教授、国際情報社会科学研究所長

いしは不充足さを、それ程痛感しない学問分野もあろう。そもそもまたそういう要望ならば、専有の計算機をもつべきであるという意見も当然おこるであろう。しかし時代の要請は絶えず進展し、その声はもはや無視できない。

批判に対する反論をおしつめてゆくと、大型計算機センターは、作業内容は、数値計算、統計処理を中心とし、作業方式はバッチ方式でゆく、これを根本方針として、これ以外の作業内容のものはそれぞれの目的に応じて別に設定するがよい、TSS方式のものは、端末数の或る規模までは引受けるが、それ以上は別のところで考えて欲しいというような態度も考えられないことはない。確かにこれも一つの行き方であろう。しかしこれが唯一の解決策でないことは確かであり、また最良の解決策かどうかは、他の解決諸方策と、綿密に対比した上でないと、にわかに判断を下しえない。

問題は、すでに既存の体制があるだけに、却って複雑である。ただこの際大切なことは、大型計算機センターの設置の目的という原点にまで立返り、考えることに思われる。世界の動向ということも当然よく見聞しておきたいことである。研究と教育との場として、計算機は本来大学の果すべき任務に役立つためにおかれているのであって、数値計算や統計処理は大事ではあるが、研究、教育の一部分であって全部ではない。世界的な動向として、明らかに看取できる方向は、計算機間のネットワーク・システムをつくり、これを通路として、地域的、専門的に分散して配置されるであろう、もろもろのデータ・ベースを共同利用できるような情報ネットワークをつくることである。この公用データ・ベースに附随して利用されるべき、研究者ファイルがそれぞれの研究室に存在するという体制へ向って時代は進んでゆく。この動向は、アメリカ、欧州諸国の何れにおいても、顕著である。現在計画されている欧州のEURONET計画、ドイツの第3次情報及ドキュメンテーション計画、フランスの独創的な情報検索諸方式など、時代の進展ははげしい。

九州大学大型計算機センターも、わが国の他の大型センターと同様、現在全国共同利用大型計算機センターに近い将来において直面すべき課題として、今から十全の考察を行われんことを希望したいと思う。そして、九大型計算機センターの担うべき任務を、分散型データ・ベース利用方式とか、整備すべき研究者ファイル等とかに関連させて、今から具体的に検討を加え、構想をうち樹てておくことが望ましいと考える。

西日本地区にある情報科学の研究の伝統に期待がよせられているのである。